
隣の壺の中のジン様

尾黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣の壺の中のジン様

【Nコード】

N5251T

【作者名】

尾黒

【あらすじ】

私は新米のジン（精霊）。ランプの精霊のような力は一切ありませんが、今日も主のためにがんばります。▼日本で生活していた記憶を持ったまま転生してしまったヒロインの、派手さの無いジン生活。

ジン、という言葉聞いたことがあるだろうか。

アルコール度数が高い酒ではなく、仁義を重んじるの方のジンでもない。

アラジンのランプの精霊がそうであると言えば理解してくれる方も多いかもしれない。

ランプの精霊や指輪の精霊は、『ジン』と呼ばれる超自然的な存在であるとされている。そして、彼らはジンの中でも『イフリート』と呼ばれる種であり、『魔神』と呼ばれる。彼らのもう一つ上の階級のジンは、『マリード』と呼ばれ、『魔霊』と呼ばれている。

ここまで言えばわかるだろうが、ジンという存在には階級制度がある。先にのべた二種の下に、シャイターン（悪魔）、ジン（妖霊）、ジャーン（悪霊）と続く。

このようなことをつらつらと語っている私は、ジンニーヤー……男性のジンはジンニー、女性はジンニーヤーと言う……と呼ばれる、女のジンである。

私がジンとして生まれたのは、500年は前になるだろうか。既にはるか昔と言っていいほどの時間が経っている為、定かではないことを謝罪しよう。

当時、私は自分がジンとよばれる者であるという事を知らずに、

砂嵐吹きすさぶ荒野の真ん中で生まれた。

まわりに同じような存在が居なかったから、知識が無いのは当然と言えば当然だった。なまじ、私には前世の記憶というものがあつた。それが、自覚を邪魔してしまったのだと今ならわかる。

私がかもともいた世界をなんと呼ぶのか知らないが、この世界には名前があつた。

神が確かに在り、別の世界の存在が認められているが故の現象なのであろう。

この世界の名は、『ファ・ブリーズ』。

よい香りがする上に、消臭効果がありそうな名である。

とはいえ、そんな世界の名前に疑問を抱くなんて存在がこの世界にいるわけもなく。私の、この微妙な気持ちをわかってもらえる日は、ジンとして生きている限りは決してこないだろう。

話を戻そう。

私ははじめ、自分は死に、幽霊になってしまったのだと思つていた。

なぜなら、当時私が話しかけた人間は、誰も私の姿を見ることが出来なかったからだ。

動物たちは私に向かって威嚇の声を出したり、おびえて見せてくれもしたが、人間は誰もが私の呼びかけに対して無視を返してくれた。いや、無視と言う意思がある行動ではなく、ただただ、私に気がつかずにいただけだ。居ない者にだれが意識を向けてくれるだろう。

私は、存在していなかったのだ。

絶望した。

日本という国で、気のあう仲間と一緒に働き、好きな服を買い、家族や友人と話し、美味しいものを食べ……。。

そんな生活と、唐突に引き離されたのだと気がついた。

日本に生まれ、日本のホラーを身近に感じていた私は、『悪霊』なんてものが何故存在するのだろうかと思っていた。

けれど、そのとき初めて気がついたのだ。こうして『悪霊』は出来上がるのだと。

未練、悲しみ、悔しさ、絶望、愛、憎しみ、羞恥、後悔……。。

胸のうちに湧き上がるそれらが、自分と言う存在を常に再構成し、肉の檻がフィルターとなってとどめていた変化を魂に直接反映する。

剥き出しになった魂が、善か悪か。

どちらかを自ら選択することは、無い。選ぶ必要は無い。それを判断するのは自分ではなく、他人だ。

魂の発する感情の迸りがダイレクトに別の何かに影響を与えてしまう。それが『悪霊』であるのだ。

自分が『悪霊』という存在になったと思い込んだとき、私は自分でも気がつかずにジャーン（悪霊）という最下位の存在から、ジン（妖霊）という存在へと段階を一段上がっていた。

この世界に生まれ出でてから1週間での出来事であり、ジンの世界ではさして珍しいことではなかった。

あれから、約500年。

私は立派なジンの一人として生きている。

自分をジンだと知らなかった頃の、かつての私の混乱ぶりといっ
たらない。今思い出しても背中がかゆくなる。

そんな生産性も無い時をただ過ごしていたある日、転機が訪れる。

自分を幽霊だと思い込み、悪霊として負の感情を駄々漏れに洩ら
していた頃であるので、おそらく生まれ出でてから30年は経って
いたように思う。悪霊としての行動も板につき、あえて日本の幽霊
をあらわすように言うならば、地縛霊に近かったろう。

この世界に生まれ出でた場所には、いつの間にかオアシスのよう
に水が沸き、2畳分程度ではあったが草原が出来、木も生えていた。
その木の下で、まんじりともせずに、ただただ自分の境遇と、こ
の世界とを呪っていたのだ。ある意味ニート……自宅警備員である。
日本であれば、肝試しスポットとなっていたかもしれない。

一度訪れた旅の者は二度と寄り付かない、恐怖体験アミューズメ
ントパークなオアシス。

私が旅人であったなら、オアシスの名を返上しろと言いたい惨状
である。

私が絶望に染まり、ある意味ジャパネスクホラーとしての正しい悪霊への道をたどっていたそんなとき、偶然に通りがかったマジュヌーンに助けられたのだ。

マジュヌーンとは、人の名前ではない。ジンにとり憑かれた人間の事を総称したものである。姿を見れないはずのジンの姿を見、その声を聞くことが出来る人間だ。

その日、たまたま私の提供する恐怖体験施設であるオアシスに立ち寄ったマジュヌーンの青年は、立ち尽くす私に向かって笑いかけ、「こんなところに一人でジンニーヤーがいるなんて、珍しいな。君の棲家なんだね。少しだけ休ませてくれないか？」と、声をかけたのだ。

そのときの私の驚き具合といったら、いまだに語り草になるほどだ。

混乱して矢継ぎ早に問いを繰り返す私の様子を、はじめは理解できないようであった。やがて、私がジンという存在を知らないことがわかれば、彼らの方も驚き、勘違いから発生し続けていた間抜けな葛藤を、青年と彼に憑いているジンニー（男性であったので、ジンニー）は大声で笑い飛ばしてくれた。

人間の名を、ラーシッド、彼に憑いていたジンニーをラン・イフリートと言った。

彼らは、オアシスで休ませてくれる礼に、と、親切にも私の知らないことを教えてくれた。

この世界で生きた人間が死んでジンになる場合、または、この世界で高位の存在の意思で作り出されたジンの場合、自然の力が凝縮

して長い年月をかけジンとなる場合、いずれにしても『ジン』の概念を理解して生まれてくる。それは、元の人間の記憶を魂が覚えて
いるから。もしくは、『親』となる高位の存在の記憶を多少受け継
いだり、自然という世界の一部であるのだから世界の記憶を持つて
いるから、だそうだ。

なんということだろう。私は、最初のこの時点で躓いていたのだ。

笑いながらジンについて、この世界について教えてくれたラーシ
ッドとランに、『悪霊』になりかけていた私は心の底から感謝した。
そして、やっとここで、私は自分のイメージしていた『悪霊』で
はなく、『ジン』に属する『ジャーン（悪霊）』として『生まれな
おした』のだと知った。

いるのかいなのかわからないと言われる、不確かな『幽霊』で
はなく、世界に認められた『ジンという存在』として確かに在るの
だと知ったのである。

目から鱗状態の私は、呆然としつつ、ラーシッドとランに重大な
ことを相談することにした。これを逃せばいつ相談できるかわかつ
たものではないからだ。

私が自分が幽霊であると思ひ込んだ原因。それは、弱い存在であ
る私と言うジンを見つけてくれるような人間が多くないということ。
ラーシッドたちと出会えたのは、本当に幸運だった。

長く生きた強いジンは、普通の人間でも姿を見てもらえるように
実体化することが出来る。

強いジンは、という注釈がつくのは、そのときの私には無理だつ
たからである。例外は、主に仕えるジンである。主の願いを叶える
ため、実体を持つことが出来るそうだ。

新米ジンである私は、そんな知識も惜しみなく教えてくれる彼ら
に、薫にも継る思いで相談を持ちかけた。

内容はもちろん、私と言う存在についてである。そして、同時に気がついた、この世界は私の以前いた世界と同様の世界ではないということ。

私の持つ記憶は、この世界のものではないのだ、と伝えたところ、それはなんとも珍しい事例だ、と、『ジン』であるランは言った。長く生きてきたがそんなことは聞いたことが無いとも。私も聞いたことが無い。

とはいえ、私は彼らの話を聞き、ジンという言葉思い出した。もちろん、元の世界でのことだ。

アラビアンナイトの世界が好きで、某世界的アニメ映画のアラジンのイケメンぶりも好きであった私は、ランプの魔人について調べたことがある。

だから、『ジン』という存在を私は理解していた。ただ単に、自分と結びつかなかったただけで。

「なんだ、ジンについての知識はあるんじゃないか」

『ここでのソレと同じとは限りませんので、出来れば詳しく知りたいのです』

小さな泉の水を動物の皮でできた水筒に入れて、一息ついたラーシッドが言った。

私はゆっくりと首を振って、再度教えを請うために相手の目を見つかりと見返した。

ラーシッドの容姿は一言で言うところ美形であった。彫りの深い青年で、明らかに日本人である私とは違う面立ちをしていた。全体的に平たい面立ちをしている私とは一線を画している。

ラーシッドに憑いているジンニーであるランも、妙に美形である。もしかしたらこれは、ジン関係者は美形しか存在してはいけない掟でもあるのか、と、疑ったとしても仕方がなかった。しかし、この疑いはそれから数年でおっさんだったり横幅が極端に細かったり広がったりするジンにも出会い、少しずつ払拭されるため、たいした問題ではない。

他人との交流がほとんどなかった私が、人間だったころにも会ったことがないような美形な二人と話すのは、とても気力を使うことだった。

だが、彼らは私に、ジンの世界以外の事も大変熱心に知識を与えてくれた。

彼らにとっては面白半分というところも多々あったのだったが、私にとってそれは救いの手に他ならなかった。

このとき、私はとても彼らに感謝して、彼らに大恩があるとまで思っていた。

だが、その後幾度か邂逅するうちに、彼らが愉快犯であり、面白おかしく過ごすためならばなんでもするような危険な人たちなのだと気がつくことになる。気がつくまでの数十年間、私はいつ消滅してもおかしくないような危ない目にあった。

彼らがはじめてあの泉に現れたときだって、盗賊団と追いかけてこの途中であったのだ。それを知ったのは、彼らが私のすみかを発ったその2日後の事だ。

ひげもじゃのおっさんたちが大挙して現れたときには、見えないとわかっていても木の上に逃げ隠れたものだ。おっさん達、もとい、盗賊の一団は、聞くに堪えない悪態をつきながらラーシッドを探し、

野宮の痕跡と足跡を見つけ、それが荒野に向いていると知ればすぐさま馬に乗って消えていった。

ラーシッドとランの二人組は、ことあるごとに私のジン生（じんせい。誤字にあらず。）に関わってくださったのだが、あまり思い出したいくないため、これ以上の事を語るのは控えさせてもらう。

できるなら、出会いのときの、一番いい思い出だけを残しておきたいものだ。

人間たちにはかろうじて負けはしないだろう、という程度ではあったが、ジンニーヤーとしてわずかながら力を得、ちよつとだけいろんなどところを見に行ってみようと、小旅行のようなこともして、恩人に命の危機に追い詰められるような経験もし、私は悟った。

やっぱり、あの小さな泉でじっとしていたほうがいいんだ、と。

砂漠の中にある、呪われた財宝がざくざくの洞窟に閉じ込められたり、火山に連れて行かれて、そこに住む火を吐く翼竜の前に放り出されたり、大海原に嵐の中小船に乗せられて漂流させられたり、島ほどあるのではないかと言う大きな鯨の背中に置いていかれたり。そんな危険と隣り合わせの生活をさせてくれる、ラーシッドとランの二人組の魔の手から逃げ出した私は、離れていたすみかへと戻り、再び地縛霊のような生活に戻った。

ジンには悪性と善性の者が存在する。彼ら二人は、もしかしたら悪性の側なのではないかと恐れおののきつつ、私はひっそりと彼らに見つからぬように身を潜めた。

おそらく、生まれ出でてから200年ほどたってからだだろうか。

私が離れている間、小さなオアシスは何ゆえか消えていた。ひび割れた大地のみが残る生まれた場所へ戻った私は、それでもその場所から離れる気になれず、またそこでぼーっと座ったり立ったりごろ寝したりして過ごし始めた。

そうこうしているうちに、少しずつ私の足元から徐々に緑が広がり、数十年たったころには再び小さなオアシスができていた。

これは、私の持つ力が関係しているのではないかと推測している。ラーシッドとランからの受け売りではあったが、ジンが住む場所というのは、そのジンが持つ能力に関係することが多いらしい。

私は水の能力があるのではないか、とランに言われていたのだが、私がそれまでの年月で出来るようになったことといえば。

『軟水か硬水かがわかる』だとか、『水を浄水できる、またはその逆』だとか、『マッサージが上手』というようなものばかりだ。

それ、ジンとしての能力関係なくね……？ というようなものばかりである。

確かに、ランの言うとおり水っぽい能力（水が関係ないものもあるが……）ではあるが、実際、ジンとしての能力に関係ないものも混じっている。軟水か硬水かわかるって、そりゃ飲んでみればわかるし、マッサージが上手って、それ、ジンになる以前から上手いねって言われていた。

浄水に限っては特殊能力のような気もするが、実体がない間、基本的に飲み水が必要としない私にとっては必要のない能力である。

私が棲家に戻ってきたのは、その能力の向上しなさつぷりと、役に立たなさつぷりを憂いたためでもあった。

私だって、あの有名なランプの精霊のように、すんごいジンになつてみたい！ という欲望があった。

が、才能が無いんじゃない。

私なんて、やっぱりこの誰も来ないような荒野の真ん中で、ニートしてればいいんだ。

そんな風に思って、再びニート生活を再開して更に約100年。

ある夜、初めて出会ったあのときのように、彼らが私の元へとやってきた。

今度は偶然ではない。

というか、ラーシッドあんたは化け物か。ジンでもないのに200年位生き続けてるってどういうことだ。しかも、初めてお会いしたときとまったく容姿が変わっていませんが、ということ。

そんな驚きと疑問で固まっていた私に、ラーシッドとランは笑顔で近づいてきた。

私は思わず身を引いた。その笑顔は危険だとこれまでの経験が告げている。だが、同時に、逃げることなどかなわない、とも。

「泣きながら逃げられて以来、全然会わなくなったから、……ここに戻っているって思ってたよ。それじゃあつまらないから、ちょっと出かけようか。……ね？」

いやです、と、口にする間もなく、私は真っ暗で狭い世界に閉じ込められた。

私は、すぐに気がついた。ラーシッドが服に隠すように持っていた小さな壺。あれは、ジンを封じるための魔術がかかっていた。そう。私は、あのランプの精霊の様に封じ込められてしまったのだ。

違う、違うんだ！ ランプの精霊の様になりたいっていうのは、そういう意味じゃ……、そういう意味じゃないんだよおお……！！

おおおん、と、私の叫びが反響する狭い壺の底で、私はがっくりと力なく膝をついたのだった。

そして今、私が封じられた壺がどこにあるかというところ。ある大きな街の貧民地区にある6畳から7畳程度の小さな家、その片隅、粗末な棚の上に鎮座させられている。

「みっちゃんや、今日も頼むよ」

『我が主よ、お任せください』

よぼよぼのおじいちゃんが、壺をぽんぽん、と二回軽く叩く。その後すぐに、彼は粗末な寝台の上にうつ伏せで横たわった。

私は、壺の隙間からしゅるりと体を出すと、こき、と、指と首の関節を鳴らした。

ジンとして若い頃は、それなりに『ジン』っぽい姿……アラビアンナイト的な衣装で、無駄な努力をしていた……をしていた私だが、今はTPOに合わせた姿をしている。

ちなみに今は、薄い水色の看護師のような姿だ。

そんな形から入る傾向の強い私は、よぼよぼのおじいちゃん……いや、私の現在の『主』の背に手を添えた。そして、気合を入れる、私の主に向けて言い放った。

『まいります！』

「おおおおお！」

『我が主よ、どこか痛いところはございませぬか？』

「もうちょっと上じゃあああ！」

『かしこまりました、我が主！』

現在の私は、ジンの力（か、どうかはわからないが）を使って、主に絶賛御奉仕中である。

数十分後、マッサージを終えた私は、いい仕事したー、とばかりに、流れてもない汗を腕でぬぐう仕草をした。

我が主の様子はというと、いつもどおり、とっても満足げな表情だ。よぼよぼと歩いていた主は、マッサージをしたらあら不思議、屈伸運動をして自分の体の動き具合を確認するほどに回復したようだ。

そして、主はニコニコと笑って私にしわが刻まれた細い手を差し出してくる。私は、苦笑してその手の下に、自分の両手を差し出した。

「ご褒美じゃよ。いつもありがとうのう」

『あなたのしもべである私に、ご褒美などいらぬと申しておりますのに……』

手のひらに乗せられたのは、甘いシロップを絡めた『ゴゴの実』というナッツが2つ。このあたりでは貧民層でも簡単に手に入る、お菓子のひとつだ。ナッツの形は、クロワッサンのような形であると言えはなんとなくイメージが湧くだろうか。

子供たちが好んでよく食べるものなのだが、私の主はことあるごとに私にそれをくださる。孫扱いでもされているのだろうか。

手に乗せられたナッツを見つめていると、視線を感じて顔を上げた。

この小さな家にはもちろん私の主しかないのだから、彼からの視線であることに間違いはない。

視線が合うと、私は、ぐ、と息をのんだ。痩せて落ち窪んでいる主の目。しわがたくさん刻まれた皮膚に囲まれた目の奥、黒い瞳が、子供のようにキラキラと輝いてこちらを見つめている。

今、食べろと。そういうことですね、我が主。

私は主からの期待に満ちた視線から逃れられず、ひよい、と口の中にナッツを放り込んだ。

舌の上に乗せた瞬間から感じる甘い香り。こり、と噛みしめた途端に口の中全体……、いや、全身に広がるかのような甘さ。

甘い。これでもかと言うほどに甘い。どろどろに甘い。だが、ナッツの油分がそれを柔らかな風味にかえてくれる。……ような気がする。

毎日のように主から与えられる甘味によって、私の舌も慣れてしまっているのかもしれない。身体に悪いんじゃないか、と言うほどの甘みを許容し始めている自分がいる。

このあたりのお菓子は、高級菓子から安い菓子まで、とにかく激烈に甘いものが多い。

甘いものは好きなのだが、ジンになる前にはこれほどの甘さに出会ったことが無かった私は、初めてこれを口にしたときに思わず咽むせたものだ。

「みっちゃんや、美味しいかね？」

『はい、主。とても美味しいです。主も、どうぞ』

そっと主の手をとって、手のひらに残しておいた一粒をしわがれた手のひらの上に置いた。

主は、嬉しそうに目元をゆるませて、大事そうにナッツを口にしました。

美味しいねえ、と、目を細めて言う主に、私も表情を緩ませて、はい、と頷いた。

私は、これが幸せというものか、と、穏やかな気持ちで感じていた。

こうした穏やかな日が続いていけばよい、と思っていた。

ある日の事だ。

私の主は、彼が唯一持つ財産である、小さな畑の世話をしに出かけていた。

いつものように私に、留守を頼むよ、と言い置いて出て行った主のために、自ら進んで掃除をし、家の中の片づけをした。

とはいえ、狭い家だ。それほど時間がかかるものでもない。早々にすることがなくなった私は、ぼーっと空を見たり、家の中においてある大きな貯水用の水がめの中身を、ジンの力を使って浄水したりしながら主の帰りを待っていた。

家の手伝いに飽きた子供たちが、外を駆け回るようになる午後。

いつもの帰宅時間を過ぎても主が帰ってこない。

狭い家の中をうろうろしても、戻ってこない。

探しにいきたいが、主の『願い』が私を縛った。

『留守を頼む』という言葉が私をこの家の中に縛りつけ、動くことが出来ない。

主は足や腰の具合がよくなかった。

老人にはよくあることだが、あちこちが弱っていたのだ。

だが、主は私に、身体をなおしてくれ、なんて願う事は無かった。もちろん、それを願われても、下級のジンである私は叶えて差し上げることなど出来なかっただろうけれど。

主は、ただ、体が辛いから揉み解して欲しい、と、ジンでなくとも叶えられるような願いしか口にしなかった。

マッサージをすると喜んで、また仕事を頑張れるよ、と、嬉しそうに笑って、私を褒めてくれました。

人よりも長く生きた今なら、わかる。主は、子供もいず、妻に先立たれて一人で過ごしてきた日々を寂しく思い、家族が欲しかったのだ。

余裕の無い生活の中でも甘い菓子をなんとか手に入れて、私が喜ぶようにと渡してくれる主を、私も家族のように大事に思っている。思わないはずが無い。

私だって、ずっと一人だったのだ。大事な家族を失い、一人で世界を呪うようにして生きてきたのだ。

私にとっても主は唯一の家族。

そんな主が、戻ってこない。

不安で何度も家の外に飛び出そうとして、そのたびに『願い』に縛られ、外に出た瞬間に家の中に弾き飛ばされ、床を転がった。

私は、今更ながらに元の世界の家族の事を思い出し、何度も心の中で詫びた。こんな思いを彼らにさせていたのだとしたら、ほんとうに謝っても謝りきれない。最初の頃は、自分の寂しさ、悲しさだけに身を焦がしていた。けれど、今は、ただただ、彼らに詫びたい。ごめんなさい、と。

自分をかわいそうだと思っていた頃の私を殴ってやりたい。悲劇のヒロインよろしく自らを哀れんでいたとき、私の大事な人たちが負っていたかもしれない心の傷を思うと、悔しくて悲しくて涙が出る。

私がジンとしてもっともっと上にいけたなら、帰れなくともいい、彼らに詫びる為に、次元も超えてみせる力を持ってやろうと心に誓った。

そして、今。

私は自由が欲しい。

主を助ける為の自由が欲しい。

自由が無いことを嘆いていた昔。

新しい家族への思いで縛られることに、安堵した昨日。

そして、自由が無いことを悔やむ今。

私は、誰かのために自由が欲しいと、初めて心に強く思ったのだ。

『主……』

床に転がること数十回。結局、私は壺に縛られたジン。主の家族として、何もすることが出来ない自分に絶望し、涙が溢れた、そのとき。

「じいさん、ここかい？ あんたの家ってのは」

「おお、ここじゃ、ここじゃ！」

主の声が聞こえた。

がば、と飛び起きて、目を皿のようにして入り口を見つめる。

はやく、はやく、帰ってきて、我が主。

「みっちゃんや、帰ったぞ。出迎えて、客人をもてなしておくれ」

待ち望んだ主が帰ってきた。『願い』が上書きされるのも気付かず、私は嬉しさのあまり、周りをよく見もせず、彼に飛びついた。

『あ、主！ お帰りなさいませ！ 心配いたしました、心配いたしましたよ！！』

「おお、すまんなあ。畑から戻る途中で転んでしもうてな。起き上がれなくなっていたところを助けてもらったんじゃよ」

『なんということ……！ お怪我はございませんか？ どこか痛むところは？』

「大丈夫じゃよ。それよりも、この若者に礼を言わねばならんのだや」

座り込んでぺたぺたと主の足や腰を触診していると、頭上から降ってきた声に顔を上げた。

落ち着いてみれば、主の身体を支えている青年がいるではないか。

慌てて立ち上がり、深々と頭を下げた。

『我が主をお助け下さり、ありがとうございます。何もございませんが、どうぞ、こちらへ。ああ、主はすぐ横になってくださいませ』

狭い家であるので、日中は荷物置き場となっている寝台から、慌てて物を片付け、そこに主を座らせた。そして、水がめから清い水を器に掬い、主に手渡す。

そして、客人には、あまりたてつけがよくないが小さな椅子へ腰掛けるように促し、主と同じように比較的きれいな器に水をいれ、手渡した。

青年は、水を一口口に含むと、驚いたように目を見開き、美味いな、と言って器の中身を飲み干した。もうすこし飲むか問うと、遠慮がちに器を差し出してきた青年を観察する。

清い水というのはこのあたりではなかなか手に入りにくい。

川が近くに流れているので、水不足にあまり縁が無い地域ではあるが、周りが砂に囲まれた地域である為飲み水にはあまり適さない水である。

街では井戸を掘っているが、それもあまり多くないため、貧民地区ではさらに飲み水に適した水というのは少ないと言える。

それを知っている青年は、貧民地区の出なのであろう。身なりにしても、あまり上等とはいえない。ぼさぼさの切りっぱなしの黒髪はほこりまみれであるし、元々浅黒い肌の頬には、泥が乾いた跡がついている。主のように畑の仕事をしているのではないかと思う。貧民地区の若者は、生活の苦しさから世の中に反発し、働きもしない、見るからに柄の悪いやからが多い。ゆえに、主に対して無礼な働きをする者も少なくない。

だが、彼の様子は、初めての場所とはじめて会う人物に対する戸惑いと遠慮が見える。わざわざ、明らかに貧民地区の住人である、弱々しい老人を家まで送ってくれるような、心優しい青年なのであろう。

私は安堵して、肩の力を抜いた。

そして、改めて、彼の前に跪き、頭を下げた。

『主をお助けいただき、ありがとうございました。このような暮ら

しぶりでありますれば、あなた様のような心優しき青年にも満足に御礼も出来ません。どうかご容赦いただきたく思います』

「や、や、や！ そんな丁寧な言葉で礼なんて言われたら首の後ろがムズムズするよ！ それに、今日は喉が渴いてしかたがないと思っていたところで、美味しい水をご馳走になったし、礼なんてそれで十分でもんさ」

どこかが本当に痒そうに顔をゆがめた青年は、やはり良い青年だったようだ。これなら、主を助けてくれた礼も心から捧げることができる。

『あなた様のお名前をお伺いしても？』

「ああ。おれはアリー。あんたは？」

『アリー様、ですね。私のことは、みっちゃん、とお呼びください』

「み、みっちゃん？」

『はい。主がそのようにお呼びくださるので』

「そうか。変な呼び名……ああ、いや、ごほん。ま、あんたがそれでいいならいいんだけどな。……おっと、そろそろ戻らなきゃ。おふくろが家で待ってんだ」

『さようでございますか。では、もしよろしければこちらをお持ちください』

私は、さりげなく用意しておいた小さな小袋を一つと、小さな水

がめを一つ差し出した。アリーは、それらを戸惑い一つも受け取り、中を覗いて目を見開いた。

「ゴゴの実の菓子と、水？ この水って、さっきのかい？」

『さようでございます』

ゴゴの実の菓子は、主からいただくそれを、少しずつ自分の壺に貯めて保存しておいたものだ。

悪くならないようにきちんと管理しているものだから、出来立てのように美味しいだろう。

水はもちろん、私が浄水した清い水である。雨水を飲み水として転用している家庭が多いが、それもまた完全に清いとは言いがたいものである。街にある井戸から汲み上げた以上にきれいな水である。贈り物に最適ではなからうか。

『差し出がましいようではございますが、水は先ほど喜ばれていらつしやったようなので、些少ではございますがお持ちください』

「ありがとな！ ゴゴの菓子はうちのおふくろが好物でな。でもなかなか買ってやれなくて……きつと喜ぶ。水も、こんなにきれいな水は久しぶりだし、これも喜んでくれるだろうな。ああ、でも……ただ家にじいさんを連れてきただけなのに、こんなにしてもらって、なんだか、悪いな……」

『アリー様がお母様を思っておられるように、私も私の主を大事に思っております。その主を助けて頂いたお礼でございますから、どうか受け取ってくださいませ』

先ほどから、寝台の上で横になり寝息を立てている主を、思わず

目を細めて見つめれば、アリーは納得したように頷いて、小袋を懷に、水がめを脇に抱えた。

「じいさん、結構足腰弱ってるみたいだしさ、畑仕事手伝ってやんなよ。そうすりゃ、あんたが助けてやれるだろ。ま、またじいさんが困ってたら近所のよしみで様子見てやるけどな」

『心得ておきます。ああ、お見送りいたしますね。また遊びにいらしてください。主も喜びます』

「ありがとな。そのうち、じいさんの様子見に寄るよ。じゃあな」

ひらひらと手を振って、薄闇の街へ消えていくアリー。深々と頭を下げて見送った私は、壺に戻る前に、と、家の中へと取って返し、主の身体を濡らした布で清めた。

主の命令の効力が切れた瞬間、私は再び壺の中。

暗く狭い壺の中で、私は目を閉じた。

眠る必要も無いジンの身ではあるが、この日は、壺の外に聞こえる主の規則正しい寝息を聞きながら、安心と共に目を閉じ静かに過ごしたのだった。

それ以来、時々アリーは主の家へと顔を出すようになった。

どうやら、面倒を見る家族が増えたような認識でいるようで、じいさん、じいさん、と我が主を慕ってくれているようだ。

主のほうも、これまた孫のような年齢の青年に慕われるのはまんざらでもないらしく、私だけではなくアリーにもゴゴの実の菓子をあげて喜ぶようになった。

そうして親しく暮らしていくうちに、アリーは私に言った。

みっちゃんで、ジンなのか？ と。

私は呆れてものも言えなくなった。

あんたは今まで何を見てきたのかと。たしかに、主が申し付ける命令と言うか願いごとは、こまごまとしたことばかりで、本当に孫に用事を言いつけているような状態であったので、壺に戻る瞬間と言うのを見ていなかったのかもしれない。

だからといって、家族を『主』と呼ぶかい！ と、つつこみをいれれば、確かにそうだな、としたり顔で頷いた。

私はこの時、この子大丈夫だろうか、誰かに騙されてしまったり利用されてしまったりしないだろうか、と、不安に思った。

そして、このときの私の心配は現実のものになる。

「みっちゃん、おれ、ちょっと東のブランダの町にある地下遺跡に行くことになったんだ」

ぶー！！

「うわ！　なんだよみっちゃん！　水、噴出して！　もったいないだろ！」

『何を言い出すんです、あなたは！　地下遺跡へなんて、何の用があるんですか！』

主が畑仕事の帰りに倒れたあの日から、私は頼み込んで共に畑仕事へ連れて行ってもらえるようにした。今も、主の仕事の手伝いをして木陰で一休みしているところである。

私が手伝うようになってから、どういうわけか主の畑は実りが豊かになり、僅かに生活の苦しさも緩和されてきた。余裕が出てきたはずの主は生活を改めることもせず、無駄遣いをする可言えば私とアリーへのおやつをかうくらしいものである。

主は隣の畑の友人と話をしているので、私は、自分の仕事を一区切りさせて遊びに来たアリーと、並んで畑を眺めていた。

労働で渴いた喉を潤すために水を口に入れた瞬間のアリーの爆弾発言に、私は口の中のを全て噴出してしまった。それはもう、コントかというくらいに見事に、だ。

ここが畑でよかった。私が噴出してしまった水は、作物のために大地に返したのだ。そう思おう。

「いやあ、最近世話になってる人にさ、頼みごとされちゃって。砂漠の遺跡の中にある、万能薬？　っていうのか？　それを取りに行く手伝いをして欲しいんだと」

アリーは、母親から渡されたというサンドイッチのようなものを齧っている。もぐもぐと口に含みながら言うので、聞き取り難い。このあたりの穀物は全体的に黒っぽいため、パンも黒い色をしている。パンとは呼ばれずに、バナシユという名であるが、私の昔の記憶に照らし合わせれば、ハンバーガーのバンズのような形をしているように思う。その中に挟んであるのは、アリーの家の畑でとれた野菜を炒めたものだ。香ばしい匂いが食欲をそそる。

私は、気を落ち着けるために懷に入れておいたゴゴの実の菓子を口に入れた。

『なぜあなたなんです？』

「おれがさ、すばしっこくて体力もあるからって。その世話になってる人ってのが、結構な年寄りでさあ。若い人手がいるんだって。ここの若いのついていやあ、盗人に近いやつらばかりだろ？　だから、まともに仕事してるようなおれに頼みたいんだとさ」

『そのひとの名前は？』

「ラーシッドっていう人だよ」

ぶーー！！

「うわ！！　みっちゃん、さっきからいったい、どう……」

再び、私の口の中のものが噴出された。ゴゴの実の菓子は、畑の栄養となるために大地に返したのだ。もう、どうにでもなれ！

『絶対に行ってはいけません！ それは罠です！！』

「わ、罠？」

『私がラーシッドの口車に乗せられてどんな目にあわせられたか、事細かにお教えいたしましょうか？ ええ、そうですね、7日ほどは睡眠一切無しで朝から晩までお聞きいただくことになると思いますが、よろしいですか？ よろしいですね？』

「いや、よろしくないって！ なに？ どういうことだよ、知り合いなのか？ ラーシッドもジンなのか？」

『ジンであったならまだ説明がついたものを……あの人はいったい何を考えてアリーを……』

どうも、この話の流れ、既視感を感じる。しかし、長く生きていと記憶が大昔のものと最近のものが交じり合ってうまく思い出せない。もやもやする。

いや、無理に思い出さずとも、愉快犯ラーシッドの名をほしいままにしている彼の事だ。絶対に危ないことのはずだ。

『ラーシッドは他に何か言っていますでしたか？』

アリーは、暫し考えるように視線を彷徨わせて、必死に思い出そうとしていた。

「そんなこと言われてもなあ。地下の遺跡に入るってくらいしか…

…。ラーシッドの故郷の王様から、万能薬がどうしても必要だからって、使いに出されたって言ってたぞ。ただ、候補の遺跡がたくさんあるから、おれ以外にも何人か若いのに頼んで別の遺跡に行ってもらってるんだってさ」

『あやしき爆発!!!!』

「ば、ばくはつ？」

『ともかく、ラーシッドの持ってくる話は全て断ってください』

「……みっちゃん」

『なんですか?』

「ラーシッドだってさ、臣下だったら王様に頼まれたら断れないだろ。こんなところまで一人でやってきて、広い世界のなかでしらみつぶしに探しているなんて、かわいそうじゃないか」

『……それが罠以外のなんだって言うんですか。私は、その王様の話しすら信じません。危険です、行くのはやめてください、アリー。あなたに何かあったら、主が悲しみます』

「んー。いや、まあ、何とかなるだろ。おれの事は心配すんなよ。みっちゃんは、おれがいない間、じいさんのこと頼むぞ。ああ、おふくろのこと頼むわ」

『アリー……』

主が休憩を終え戻ってくるのが見えた。アリーは、笑って立ち上がると、主の元へと歩み寄り、今の話を告げているようだ。アリーの母の事は任せよ、と、主は胸を叩いて請け負っている。

私は深く深くため息をついた。

主に言われ、私は、アリーが街を出る前に、彼の元を訪れた。主から、彼が無事に戻ってくるように見送ってきなさいといわれたのだ。

私は、彼に水筒を持たせた。その中には私が力をこめた石が入っており、水筒に水を入れればいつでも清らかな水が飲めるというものだ。今の私には、それ以外に彼を助けることは出来ない。私は力の無いジンなのだ。ランプの精霊のように力のあるジンであれば、瞬く間に遺跡と街とを往復できただろう。

壺に縛られ何も出来ないことを詫びると、アリーは驚いたのか一瞬黙り込んで、次に朗らかに笑った。

みっちゃんはいいさんのジンなんだから、じいさんのことだけ大事にすればいいのさ、と言うのだ。

それはそうだろう。

けれど、私は、アリーのことも家族として大切に思っているのだ。

力もなく、自由もないこの身が切ない。そんなことを、主を失うかもしれないという不安を覚えたあの日以来であったが、再び心にしたのだった。

家族皆を助ける力も無ければ、自由に助けに行ける自由もない。

ならば、私は何故このジンという存在になったのだろう。

小さく見えなくなっていくアリーの背を見送りながら、私はそつとため息をついた。

アリーが旅立ってから5日経った日のことだった。

私はいつものように主の畑の仕事を手伝い、さらに、アリーの家の畑の仕事も手伝った。

アリーがいなくなってから、それが私の日課となっている。

主にも、アリーの母の手伝いをせよ、と言われているのだ。時々彼女の様子を見に行っては、彼女にもマッサージを施している。

その日は、とても天気の良い日だった。

主に頼まれ、畑仕事に行く前に市場に立ち寄った。

そこで、若者たちの話を聞くとはなしに聞いていたのだが、ジンになって優秀になった私の耳は、ある単語を拾った。

『アラジン』

アラジン、だ。なぜこんなところでその名を聞くのか、理解できなかった。

露天のおばちゃん呼びかけも聞こえないほど混乱し、立ち尽くした。だが、いつまでそうしていても仕方がない。

私は、慌ててアリーの家へ走った。そして、あいさつもそこそこに、アリーの母に問うた。

「あら、みっちゃんたら、知らなかったの？　そうよ、『アリー』は愛称。『アラジン』の愛称なのよ」

私は、そのままその場で膝からガックリと崩れ落ちた。

市場で、聞こえてきた話とは、こうだ。

『最近、白壁地区のアラジンのやつ見かけないな』

『アラジン？　ああ、アリーのことか？　あいつなら、仕事で東のブランダの町に行ってるってよ』

『オレのダチの商人地区に住んでるアラジンって名前のヤツも、今街を出てるんだってよ。儲け話がどうか言ってたぜ』

『へえ。同じ名前のやつらがねえ。まあ、アラジンって名前は珍しくもないからなあ』

『お前の知り合いのアラジンもか？　俺の従兄弟のアラジンも、なんだか仕事持ちかけられて隣町まで行ってるんだ。従兄弟に何人か「アラジン」がいるからよ、ソイツの事はアジーって呼んでるんだ』

『おお、わかるわかる！　アラジンって名前多いよな！』

私は、若者たちの会話を聞いて、確信した。

ラーシッドは、私が以前彼に話した、『アラジンと魔法のランプ』のお話を、自らの手で実現させようとしているのだ。

だが、知らなかった。アラジンという名前の若者がこれほど多いとは。

ラーシッドがどのアラジンを選ぶのかはわからないが、おそらく、はじめの試練をうまく越えてきた若者を選ぶのだろう。

選ばれた『アラジンたち』には、それなりに難しい試練が与えられているはずだ。

私は、どうすべきだろう。

もんもんと悩みながら、私はアリーの帰りを待った。

彼が帰ってきたのは更にその4日後。

彼は見事に、ラーシッドの試練を乗り越えてきた。

これで、彼が試練に失敗し、うなだれて帰って来たと言うのならば、またいつもどおりの生活に戻ることが出来ただろう。

けれど、彼は、一つの難しいことを成し遂げたという自信をつけ、大きくなって帰ってきた。

そして、冒険の厳しさと共に楽しさも知ってしまった。

彼はもう、以前のように平凡には暮らしていけないだろう。

そして、もう一つ。

アリーだけでなく、幾人かの『アラジン』が試練をうまく乗り越えて街へと戻っていたのだ。

私は決意した。

自分たちも苦しい生活をしている中、主を助けてくれ、結果的に私をも助けてくれたアリー。私の持てる力をすべて使い、彼を幸せにしてやろう、と。

私は、いつものように壺を叩かれると表へ出て、主のために働く日々。

その間にも、アリーの周りはめまぐるしく変化して行った。

彼が最初の試練を乗り越えた後すぐに、同じく試練を乗り越えたほかのアラジン達とともに、2つ目の試練である『砂漠の地下洞窟』へと向かうという仕事を持ちかけられた。

アリー含め、アラジン達は『砂漠』の脅威に躊躇したようであったが、誰もがその仕事を請けると誓ったようだった。

砂漠ならば、アリーに以前渡した水筒は、彼の冒険の役に立つだろう。私は、水筒に再び魔法の力をこめた。いつでも水が湛えられている様にと、力いっぱい魔法をかけた。

でも、私が『彼の冒険の手助け』となれるのはそれだけ。

アリーはそれでも、ありがとうといつもものようにお礼を言ってくれた。

それから、彼の姿を見ない日が続いた。

砂漠から無事に帰ったアリーは、そのまま新たな冒険に出かけてしまったからだ。

日課の主のマッサージをしているとき、主は時折寂しそうに、アリーは元気にしておるじやろうか、と呟く。

アリーの母親の様子を見に行くとき、アリーの母は、寂しそうに、

あの子はどこで何をしているのかしら、と呟く。

そんなとき、ごめんなさい、と、申し訳なく思う。

私が彼が幸せになるように手伝おうなんて思わなければ。

けれど、アリーはきつと、そういう運命の人間だったんだろう。

私が出さずとも、どんどん先に進み、成功をおさめていたはずだ。

……というのは、私の希望である。

もちろん、我が主も、アリーの母も、アリーが仕事で成功し、豊かに暮らしているのをうれしく思っている。

そのころ風の噂で聞こえてきた話では、どうやら、ラーシッドにつれられて王様に謁見までしたらしい、とのことだった。

その際、とても力のあるジンが封じられたランプを使って豪華な贈り物をし、更には以前手に入れた万能薬を使って王様の娘である王女の病を治して見せたという。

ちやくちやくと、物語のようにのぼりつめていくアリー。

私は、彼の偉業を聞くたびに、うれしく思っていた。

主とともに、アリーの事を話題に出してはお互いに笑いあって幸せな気分浸ったものだ。

大切な人が幸せならば、自分も幸せだ。

それから数年経ち、アリーが万能薬で治療した王女様正式に結婚し、次期王として頑張っているという噂が聞こえてきた。

そんななかでもアリーは母の事を忘れておらず、彼女を王宮へと

招く準備を整え、共に暮らそうと言ってくれたらしい。

アリーの家へとお邪魔したとき、アリー王太子の使いだという兵士と召使数人が、アリーの母の荷物を運び出していたのを見た。アリーの母がうれしそうに笑いながら近づいてきて、教えてくれた。

よかったですね、お幸せに。

私は、心から彼女に祝福の言葉を贈った。

最後だから、と、私は、王宮からの使いが持ってきていた立派なじゅうたんの上で、アリーの母へマッサージを施した。近頃、彼女もあまり足腰の調子がよくなかったのだ。

彼女の腰が冷えないように、温めながらマッサージしていく。そんな私とアリーの母を、興味深そうに一人の召使の女性が見学していた。王宮にうつってからも、アリーの母親に同じようにマッサージをして差し上げたい、と、照れたように笑った召使。

彼女のような人間が王宮にいるのならば、アリーの母も心安らかに暮らしていけるだろう。

私は安堵して、見学していた召使にマッサージのコツを伝授した。

「みっちゃん、あなたにはとてもお世話になったわね。アリーがいなくなってから、あなただけが心の支えだったわ。毎日私のために……ありがとう、けしてこの恩は忘れないわ」

『私もです。お母上様にはいつも私も助けられておりました。今までご苦労ばかりでしたでしょうが、これからは、あなたの大事なアリーが、あなたを守ってくださいます。お幸せに。家族みんなで、幸せにおなりください。それが私の『願い』です。私も、あなた方のことは、けして忘れはしません』

「みっちゃん……。あなたこそ、幸せになるのよ。あなたはこれから……」

アリーの母は、涙ぐんで私の手を握ってくれた。私もつられて、くしゃり、と顔を歪ませてしまった。

ああ、いけない。

最後は、そう、潔く、私が生まれた出でた地に湧く水のように、清らかに。

『おさらばです、お母上様。アリーと、お幸せに……』

立派な馬車に、恭しく手をとる召使たちと共に乗り込んだアリーの母は、勢いよく馬車が走り出してからも、ずっとこちらへ手を振っていた。名残惜しげに、見えなくなるまで。

私の視界から彼女の乗った馬車が見えなくなった。

その瞬間、私は、主の『願い』が成就したことを感じた。

私はそのまま、暗闇へ飲み込まれた。

その場に居合わせた者がいたなら、私が一瞬で消えうせたように見えただろう。

壺の中は、相変わらず闇と共に閉ざされていた。

静かだった。

壺の外に聞こえるのは、風の音だけ。

以前聞こえていた、主の息遣いは聞こえない。

もう、私が封じられた薄汚れた壺を軽快に叩いてくれる手は無い

のだ。

主の眠る街外れの墓地に共に埋められた、砂埃に汚れた小さな壺の中で、私は目を閉じた。

主の最後の『願い』の言葉がよみがえる。

『アリーの母上のこと、頼んだぞ。彼女はみっちゃんしか頼るものがないのだから。せめて、アリーが迎えにくるまでは……』

主は、最後までアリーを案じていた。そして、その枯れ木のような手で、私の頭を撫でて、言った。

『みっちゃん……、ミリーア、お前も、幸せにな』

主、私は幸せです。

家族を得、最期を看取ることが出来て、幸せです。

少なくとも、以前の私は見送られる側だった。残してくる側だった。

残される寂しさもあるでしょう。けれど、大事な家族を残していくことが無いということは、私にとってとても幸せなことです。

きらびやかな宮殿の中で、美しい乙女を抱き、老いた母と共に幸せそうに笑っている青年を思い浮かべ、私自身も幸せな気持ちで、意識を闇に沈めていった。

6 (e n d)

「ア」

「きて、ミリーア」

何かに呼ばれた気がして、私は目を開けた。
どれくらい沈んでいたのだろう。

「起きたね、ミリーア」

聞き覚えのある声が、壺の外側から聞こえてきた。
ああ、これは、すべての元凶でもある……

『ラーシッド……』

あわてて身を起こすと、私は実体を失っていた。
そうだ。

私は主を失い、最後の『願い』をかなえた後、また野良ジンニー

ヤー（壺入り）に戻ったのだ。

『なぜ、ラーシッドがいるの？』

「君が主を失った後、すぐに君を封じた壺を探したんだよ。あのままでは、力の弱い君はすぐに消滅してしまうと思ったからね」

『それは、ありがとうございます……？』

よく考えれば、すべては彼の仕業なのだから、最終的に責任を取ってくれるのは当たり前的事ではなからうか。

そんな気持ち駄々漏れの、お礼とは言いがたいお礼を口にした。

ラーシッドは、それに対して怒った様子も無く、ただ小さく笑う気配がした。

「君にね、聞きたいことがあってきたんだ」

『なんです？』

いつも私が彼に聞いてばかりだった。

彼は私にいつも答えをくれた。

だから、私は彼に問われたことには正直に答えると決めている。

「『アラジンと魔法のランプ ごっこ』をしていたことは、君は知っているね？」

『悪趣味だと思っていました』

「まあ、君なら気づくだろうと思ったよ。そのまま、君から聞いたのと同じ、『アラジン』という名の青年を何人も駒にしたんだから」

『私は、あなたのそういうところが少し嫌いです』

「君の事は好きだよ」

『そうですか、ありがとうございます』

「気のない返事だね。ああ、話がそれた。それでね、……君、何をした？」

ぐらりと、と、地面が揺れた。

私の入っている壺が揺れただけなのであろうが、それと共に、一気に気温が下がったように感じた。

ラーシッドの発するプレッシャーが、気温が下がったと感じる空気を作り出していた。

私の実体の無いはずの体に、鳥肌が立っている。

「アラジンたちを争わせて、もっともふさわしい者を選ぶつもりだったんだよ。もちろん、怪我をしたり死んでくれたりすれば、血が流れる。それも目的のひとつではあったんだけど」

ジンには、善と悪がある。

人間と同じように。

もともとそうだった者もいれば、あとから堕ちる者もある。

悪のジンは血を好む。

ぞ、と、怖気がたった。

「イーフリートであるランの力を使って、力あるジンの封じられた遺跡を探し、封印を緩め、アラジンたちを向かわせて……。血を浴びて封印を解いたジンの力を得た『アラジン』たちが争いあう。

それはもう、大事になっただろうに。

ねえ、ミリア。血に塗れて血に酔った『アラジン』が、君の語ってくれた物語のように王になったら、国は楽しいことになったと思わないか？

それなのに、『君の友人のアラジン』は、ことごとく邪魔をしてくれた。

第1の試練を超えてきたアラジンたちは何人かいた。けれど、君のアラジン以外は第2の試練の場にすら現れなかった。

ねえ、いったい、君はどうやって『君のアラジン』を助け続けたの？」

外の様子がまったくわからないことに、恐怖を感じたのはこれが初めてだった。

私は、震える体を自らで抱きしめ、頭上を見上げた。
見えるはずの無い、ラーシッドを見上げるように。

『私は、ただ』

私は、ただ、話に沿うようにしただけ。

そう、私がしたことは、私の知る物語に沿うように……

『私は、ただ、主に、……足腰の弱った主の健康のために、散歩をしましょう、と、そうお願いしただけ』

「……散歩？」

私の言葉の後、しばしの沈黙が落ちた。ラーシッドから向けられていた威圧の気配が消え去り、気の抜けたような声が聞こえてきた。私は、こくり、と頷いた。

見えはしないだろうけれど。

『街を散歩して歩いただけ。そのとき、『アラジン』たちの家の近くを通ったかもしれないね』

私は、あのととき、アラジンと魔法のランプの話から逸れている原因は、『アラジン』が何人も存在していることだと思った。

それならば、あの物語のとおり、アラジンを一人にしてやればいいのだ。

「君の友人の青年以外の『アラジン』たちがあのととき現れなかったのは、君の仕業か」

『ちよつと、お腹を壊してもらいました』

私は、水を浄水できるだけでなく、腐らせてしまうことも出来る。アラジンと名のつく人間の家の水を、散歩がてらちよつとだけ悪くしてしまったのは、私だ。

もちろん、後日すべての家の水をきれいにしに行った。

私が浄水した水を飲めば、たちどころに腹の具合もよくなる。……らしい。

やらかしてしまってから、どうやって償おうかと思っていたのだが、皆、水を飲んで腹を壊し、水を飲んで回復していた。いつの間

にか私の水には特殊効果がついたのだと、そのときに知った。

アラジンたちが皆腹を壊してしまい動けない中、アリーは一人、話の流れに沿って力のあるランプのジンを手に入れ、成功への階段を駆け上がっていった。

実際、私は何もしていない。

私がしたことといえば、ほんとうに、ただその一度だけの手助け。それだけだ。

『私がしたのは、ただ、一度。……でも、』

私は、気がついてしまった。

『ラーシッドは最初から、『私のアラジン』を選ぶつもりだったのでしょう』

「……なぜそう思う」

私に助けさせないつもりだったのなら、私のいない街ですればよかった。

私に気づかれないようにやればよかった。

私がほかに話した物語はたくさんあった。

アリババだとか、シンドバードだとか、さまざまに。

なのに、アラジンを選んだのは、私がアラジンの話が好きだと、そう言ったからではないだろうか。

そして、もうひとつ。

『ラーシッド。主のお兄さんと同じ名前。主の家では、長男にラーシッドと名づけるんだって。……主は、あなたの、……子孫？』

「……ラーシッドなんて名前は、ありふれているんだよ。『アラジン』のように」

『主は、最初からジンである私に優しくかった。昔、まだ戦が絶えない頃、一族を救うために力の強いジンにとりつかれて不死となり、皆に迷惑がかかるから、と、世界を彷徨っているかわいそうな人がいたんだって。』

その人の名前がラーシッド。

彼がいつ帰ってきてても家がわかるようになって、かならずラーシッドの名前を生まれた最初の子供につけるのが慣わしになったんだって』

知っていた？と、壺の外にいる相手に問いかければ、沈黙が返ってきた。

半人前の私を主のもとへとつかわせたのは、私を成長させるためでもあり、自らの一族の末裔を見守るため。長い年月を過ごしてきたラーシッドは、いろんな経験を経て、世界に当然のごとく存在する善も悪もその中に受け入れて、……性格もひねくれてしまっているのだろうけれど。

彼の持っている優しさは、きっと、常に輝きを放っている。

『私は、主の役に立ったかな？』

なんにも出来ない、力のないジンだけれど、すこしは私は彼のためになったのだろうか。

主の心の平安を守れただろうか。

ラーシッドの心の平安を守れただろうか。

『主を助けてくれた青年が『アラジン』という名前だって知って、ラーシッドは『アラジンと魔法のランプごっこ』を思いついたんでしょ』

私が確信を持って告げると、ラーシッドが深くため息をついた。そして、いや、と否定の返事をくれた。

「君を壺に封じるその前に。男子に『アラジン』という名をつける慣習が多い街を探し」

ぴしり、と、何かが割れる音がする。

「我が一族の末裔がいる街を探した」

びし、と、今度はもっと大きな音。それは、私の足元から聞こえた気がする。

暗闇しかなかったそこに、光の亀裂が入った。

ジンの私にはまぶしいという概念はあまりないが、元が人間である。思わず目を閉じた。

「ミリーア。君をりっぱなジンに育てようと思ったんだ」

気がつく、私は実体を伴って壺から開放されていた。地面には、割れた壺の破片が散らばっている。

地面から視線をあげればそこには、眉間にしわを寄せて苦悩する

ラーシッドの顔。

「君は二重に魂を持つ、稀なるジン。けれど、一度目の人生の記憶が、君をいまだに縛り成長を妨げている」

それはうすうす感じていた事実だ。私は、所詮私であるという意識を捨てられない。

それよりも、私はなぜラーシッドに抱きかかえられているのだろうか。それも、横抱きで。

「いろんなところへ連れて行き、君がもはや人間ではないのだということを自覚させようとしたが、……人間くさく泣き喚いて逃げ出すし」

そんな意図があつて私を危険な目にあわせ続けたのか。まったく知らなかったというか、気がつかなかった。ただ単にラーシッドがおにちくしょう鬼畜生なのかと思っていた。

「人間の主と共に生活させればジンの自覚も出るかと思えば、更に人間の部分が刺激されたのか、人間のように生活するし、命令以外のことに気を利用させるし、まめまめしく自分の主の世話をして……普通のジンはそこまでしない。……知っているか？ お前の主が死んだとき、誰がお前を嫁にもらうかで近所で争奪戦が繰り広げられたのを」

なんですかその情報。私知らなかったよ、それ。なんでそんなことに？ え？ 祖父によく尽くす孫だと思われて、よく働く嫁候補として見られていた、と？

それはそれは……ジンになる前にそういう浮いた話がほしかったですな。

————————————————————

『ミリア、怒っているのか？ ラーシッドは私の手伝いをしてい
るだけであってだな……』

『ラン様のハゲ』

『ハゲてはおらんわ!!』

ラーシッドにとりついているジン、ラン・イフリートは、ただ単
にイフリートというファミリーネームなだけであり、実質の彼のジ
ンとしての位はマリード（魔霊）と呼ばれるもっとも位の高いジン
であった。

ジンというのは、毎日毎日ポコポコ生まれているわけではない。
新たに生まれるというのは、本当に稀なことなのだという。

そして、私のように、何も知らない状態で生まれてくるジンも、
居ない訳ではないらしいが、それもとても少ないといわれている。

生まれたばかりのジンや、悪まっしぐらに向かっていくジンを導
き、軌道修正してやるのがランのように上位のジンの仕事なのだそ
うである。さらに、弱いジンは、うっかり悪い人間に使役されない
ように、強くなるために修行をさせられる。ジンとしての位をあげ
ていくその手段や方法はすべて、各ジンたちに任されているらしい。

私の場合、生まれたばかりで、何も知らず、以前の記憶があるば
かりに悪まっしぐらに突き進もうとしていた、という三重苦な状態

であったため、指導役のなかでも上級であるラーシッドとランの2名が担当となったのだという。

ミリーアという私の名前は、ラーシッドとランにつけてもらった名である。

名付け親になったジンには、名づけたジンの場所がわかるようになるのだそうで、つまり、私はどこに逃げても彼らには丸わかりなのだということだ。

「ミリーア」

『……。なんですか』

「悪かった。だから、この水の膜をどけてくれ」

ラーシッドとランは、私の魔法で作り出した水の幕のせいで、体育座りをしている私のそばへはよってこれない状態である。私は、すべてが仕組まれていたとわかり、シャイターンという位にあがったとたんに、使える魔法が増えた。

今までの私の苦労はなんだったのか。

やはり水が私の力の根源であり、使用できる魔法はほとんど水に関するものばかりである。

ああ、そうだ。

マッサージがうまくなくなっていた原因は、血流の流れやリンパのあれこれ私が無意識に操っていたというオチがつく。

私の技術が上がったわけではないらしい。でも、もともとそこそこのスキルはあったわけだから、これからも腕を磨いていこうと思う。

「ミリーア。もう許してくれ。

お前の教育と、私の望みと、ランの仕事、すべていっぺんに済まそうとしたことは謝る。

そして、まあ、確かに私たちの娯楽のために仕込んだことも認めよう。

けれど、これだけは信じてくれ。私もランも、お前の事をとても大事に思っているんだ。お前がお前の主や、アリーを思うように」

ラーシッドの言葉に、ぴくり、と私の体が反応を返してしまった。それを見て取ったラーシッドとランは、怒涛の攻撃を仕掛けてきた。

どれだけ私の事を大事に思っているか、どれだけ心配しているか。そんなことを、恥ずかしげもなく言い続けるのだ。

あんたらは浮気が彼女にバレた彼氏か。

散々愛を語られて、食傷気味になるころに、私は、にっこりと笑って、二人のほうを向いた。

『私は、主とアリー、アリーのお母上のほうが、二人よりも好き』

結局のところ、私はずっとこの二人に遊ばれていたわけだ。暇つぶしの道具にされていたわけだ。

彼らの言葉は信じよう。

彼らの優しさも、信じよう。

でも、私は私の中にある人間らしい怒りの感情も、拗ねる心も、捨てることはないのだ。

主の事を、愛した心。 アリーを愛した心。 アリーの母を愛した心。

彼らの幸せが私の幸せ。

もう、そばにいることは出来ないけれど、あのうれしそうな笑顔を思い出せば、私はジンとして生きていけるだろう。

誰かに仕える囚われのジンではなくなった私が、つくすことを強制されているわけでもない私が、それでもずっとこうして愛を胸に抱きしめていられるのは、すべてをあきらめていた私を一番最初に救ってくれたラーシッドとラン、二人のおかげ。

それを伝えるのは、どんな願いも叶えられると、自信を持てたとき。

いつの日か、私は、自分の願いを叶えよう。

千の夜、万の夜を終えてもあきらめずに、いつか、必ず。

e
n
d

6 (end) (後書き)

ミリーア (みっちゃん)

>>> 新米ジン。危うく悪性のジンになりかけていたところを、ラーシッドとランに助けられる。

>>> 前世の記憶がある。以前は日本で生活していた成人女性。

>>> 最初で最後の主である老人を、家族のように思っている。アリーは弟のように思っている。

>>> 妙に強いジンに成長する、予定。水の特性を持ったジン。

ラーシッド

>>> マジュヌーンという、ジンにとりつかれる特性を持った人間 (男) だったが、もう半分ジンになっている。

>>> すごく長生きしているらしい。実は、とりついているジンはランじゃない。ランは相棒。

>>> とりついているジン (風の特性を持ったイフリートの位のジン) を完全に掌握しており、主導権を握っている。

>>> 気長に罫^{えげつない}を仕掛けるのが好き。癖のない黒髪に黒目、イケメン。

>>> ミリーアのことは、本人が思っている以上に大事にしている。

ラン・イフリート

>>> イフリートの位のジンと見せかけてのマリードという高位のジン。強い。男。赤い髪 of イケメン。

>>> ラーシッドと同化しているジンとは別物。炎の特性を持つジン。

>>> 世話好きで、指導役だとバレて以降は、ミリーアをかいがいしく世話してやる。保父さんみたいなかんじ。

>>> アラジンのことが気に食わず、ミリーアから引き離すために

実はちょっとだけ王になる手伝いをしちゃった。→二人には内緒。

ミリーアの主

>>>よぼよぼのおじいちゃん。若い頃はぶいぶい言わせていた、らしい。

>>>ラーシッドの子孫というか、末裔。兄の名前がラーシッド。

>>>ジンであるミリーアをみっちゃんと呼び、孫のようにかわいがった。

>>>最後は老衰で亡くなる。ジンの特性を理解しており、自分が死に主でなくなった後、他の心無い人間にミリーアがこき使われては困ると、最後の願いを長期にわたるものにした。（『アリーの母の世話を頼むよ』）

アリー

>>>本名アラジン。彼の住む街には同名がいっぱいいたので、愛称で呼ばれていた。

>>>汚れを落とせばイケメン。くるんとカールした黒髪がチャームिंगと評判。（ご近所のおばさんに）

>>>偶然助けたじいさんの孫娘（？）に一目ぼれする。が、結局後にジンだとわかった上に脈なしと判明してあきらめる。

>>>見事意地の悪い試練（いびり？）に打ち勝ち、とんとん拍子に出世していく。

>>>王宮で王女に一目ぼれ（2度目）

アリーの母

>>>超貧乏で、息子に苦勞かけっぱなしなのをいつも嘆いていた、母。

>>>結構美人さん。みっちゃんが嫁に来てくれればいいのになー、と思っていた。

>>>王宮に呼ばれてからも、みっちゃんのことを心配して、アリーに様子を見に行ってほしいと頼む。

その後……

>>>アリーはじいさんが死んだことを知らなかったため、あわててじいさんの家に行くも、すでに別の入居者が。

>>>アリーはみっちゃんを壺から開放するために壺を探し回るが、見つけられず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251t/>

隣の壺の中のジン様

2011年5月25日04時09分発行